

# 社会運動空間における女性参加者のあり方 ——台湾ひまわり運動を事例に

陳 怡 禎\*<sup>1</sup>

Female's Distance Toward Social Movement: A Case Study of Taiwan's Sunflower Movement

Chen ICHEN\*<sup>1</sup>

This paper examines the female distance toward social movements through a case study of Taiwan's Sunflower movement in 2014. This is important because until now it has been argued that social movement was a male-centered sphere where females are always invisible.

Secondary sources with drawings and visual arts from the archive and interviews with 9 female participants as primary sources were analyzed. This paper discovered that the images of the female which were created in the social movement space as the symbols of weakness and tenderness. Furthermore, this paper argued that female participants kept distances from the center of social movement on their own initiative to go freely back and forth between their own daily life and social movement space. By focusing on the duality of the discourses of "female images which are drawn by males" and "female participants' recognition toward social movements", the present states of females in the modern social movement space have been clarified.

Further research will need to investigate the female participants' cultural practices in modern social movements.

## 1 はじめに

本稿の目的は、東アジアにおける現代の社会運動のなかで、①女性がどのように表象されているのか、さらに②女性運動参加者は、どのように自分を位置付けているのかの2点を考察することによって、現代社会運動空間における女性参加者のあり方を明らかにすることである。

そこで第一に、2014年に台湾で起こった「ひまわり運動」の運動空間のなかで創作された創作物において、「女性像」がいかん語られているのかを検討し、第二に運動に参加している女性が、運動空間のなかでいかに自身の立ち位置について語っているのかを分析していく。以上の「語られた女性」と「語る女性」という言説の二重性に注

目することで、現代の社会運動空間における「女性像」を解明することを目指すものである。

次章では台湾ひまわり運動の特徴を紹介し、参加者構成を明らかにする。また先行研究への考察を踏まえた上で、3章では、二つの軸からひまわり運動の中の「女性」を考察する。3.1では社会運動空間において、「女性」はどのように語られているかについて事例を挙げながら検討し、さらに3.2では、ひまわり運動の女性参加者が、いかに自分のポジションについて語っているかを明らかにする。

## 2 研究背景

まず本節ではひまわり運動の経緯や、その運動

\*1 日本大学国際関係学部国際教養学科 助教 Assistant Professor, Department of Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

参加者の構成を紹介し、本稿が注目している問題の所在を示していく。

## 2.1 ひまわり運動の経緯・特徴

ひまわり運動は、2014年の3月18日から4月10日までの三週間にも及んだ長期化された台湾の社会運動である。しかしこの運動は突発的に発生したのではなく、その発端は2013年6月に中国と台湾の間で締結された「兩岸服務貿易協議（兩岸サービス貿易協定）」に遡る。この協議は、中国側が80項目、台湾側が既に開放した27項目を含めた64項目のサービス貿易の相互市場の開放といった内容である。中国の開放項目が圧倒的に多いため台湾経済に有利であるという台湾や中国政府の言い分に対して、野党や民間からは、台湾の中小小売業に極めて不利だと強い反発の声が上がった。また、その協議が締結されるまでの過程が公開されていなかったため、それは「ブラックボックスの中の協議であり、民主主義によるものではない」との批判の声も挙げられていた（『今周刊』2014.3.27）。

しかしながら、与党の国会議員は、そのような意見を押し切って強行採決しようとした。その採決過程に反発した学生運動組織が、サービス貿易協定の審査を改めて実施することを求め、2014年3月17日の夜に「議場を人民に返せ」を叫びながら議場を占拠したことから始まったのが、ひまわり運動である。

では、台湾のひまわり運動にはどのような特徴が見出せるのだろうか。この運動は、1990年代以降の台湾における最大規模の社会運動だと言われているが、その理由について、①運動期間が約一ヶ月までに及んだこと、②占拠場所の範囲が広く、「日常性／祝祭性」を特徴とすること、③参加者の年齢や社会階層が幅広いことの三点が挙げられる。本節では、とりわけ②と③の点に注目する。

まずその占拠範囲を見ていこう。ひまわり運動の占拠現場は主に二つのエリアに分けられる。一つは、「立法院」と呼ばれる台湾の国会議場であり、もう一つは、立法院を囲むような周辺広場や道路である。国会議場を占拠したのは、運動初日に議

場に突入した学生運動組織に参加する大学生が多いとみられる。それに対して、周辺道路を占拠したのは若者を中心とする多くの市民であった。また主要占拠現場ではないものの、その占拠に呼応する形で台湾各地でも様々な集会が行われた。

運動全体において、国会議場は地理的に中心的な位置にあり、また周囲の道路や他の台湾地域における集会空間よりも、マスメディアからの注目度は高かったといえる。そのため、国会議場に突入した学生は、その場から離れることが難しく、終日、臨戦態勢を維持していたとみられる。その一方で、国会議場の周辺道路や台湾各地での占拠空間は、より気軽に社会運動に出入りすることができる流動的な空間となっていた。

つまり、ひまわり運動は占拠空間における「中心一周縁」という同心円のような力関係を持つ地政学的構造をなしており、中心からはなれば離れるほど、社会運動特有の緊迫した雰囲気は薄れていったと考えられる。

このような空間的な特徴を持つひまわり運動が、1990年代以降の台湾において最大規模へと発展した理由は、この運動が従来の社会運動とは異なる「日常性」や「祝祭性」（毛利2003, 渡邊2012, 伊藤2012, 富永2016, 富永2017）<sup>1</sup>を兼ね備えていたことにある。では、具体的にひまわり運動における「日常性」や「祝祭性」とは何を指すのか。

現地でフィールドワークを実施した研究者の港千尋（2014）<sup>2</sup>やジャーナリストの福島香織（2016）<sup>3</sup>は、ひまわり運動に対して次のように記述している。

集会に参加しているのは一般の市民や大学生ばかりではない。高校生、中学生の姿もあり、それぞれが自主的な討論会をシートの上で開いている。（中略）ひとこと言えば、机と椅子がないだけで、学内とほぼ同じ環境が路上に成立している。違いと言えば、その同じ場所で大勢の人が食事をしたり、仮眠をとったりしていることだ。短い時間であれ日常的生活を共にしている。一日だけのデモや数時間で終わる集会との違いは、議論や抗

議だけでない日常的営みを通して情動が生まれ、それがゆっくりと広がってゆく点である(港 2014: 126)。

(筆者註：ひまわり運動で占拠されている)議場内には大型プロジェクターがあり、政府側の会見や学生側の集会の中継が流れている。壁には美術班の力作らしい馬英九総統や江宜樺首相の似顔絵、ひまわりやブラックボックスをモチーフにしたポスターやスローガンが貼ってあった。議席の部分にメディアが陣取っている。議席後方では学生たちが寝袋で仮眠をとっていたり、試験勉強をやっていたりしていた。(福島 2016: 95)

上記の二つの記述からは、ひまわり運動の参加者が運動空間の中で友人と共に食事したり、試験勉強をしたりするといった「日常的営み」を行うことで、運動空間を日常の生活空間に変貌させていたことがうかがえる。他方で参加者たちは、絵画を描いたり、ポスターなどの創作物を作ったりすることで、社会運動に「楽しさ」を見出し、それを前景化させていたことも垣間見える。

つまり、このような「日常性」や「祝祭性」という二つの性質を兼ね備えたことで、ひまわり運動は従来の社会運動とは無縁な人々を次々と巻き込み、大規模な社会運動にまで発展したのだと考えられる。これらの論点については、さらに次節以降で詳述することとしたい。

次に、参加者の構成を見てみよう。陳婉琪と黃樹仁<sup>4</sup>(2015)は、ひまわり運動参加者の性別、職業、学歴や年齢などの構成を明らかにするために、台湾・台北大学社会学部の学生を率いて調査プロジェクトを立ち上げ、2014年3月25日から29日にかけて、議場外の占拠現場でアンケート調査を実施した。その調査結果から、参加者の構成は以下のようなものであることが判明した。まず、参加者の平均年齢は28歳、なかでも二〇代の参加率が最も高く66.8%を占めている。また、ひまわり運動はしばしば「学生運動」として位置付けられるが、実際に有効サンプル989人のうち、学生が56%(554人)、残りの44%を

社会人が占めている。過半数以上が学生であるという結果からも、当初、大学生の社会運動組織によって起こったひまわり運動は、若者を中心に様々な社会階層が集結した点が大きな特徴と考えられる。

## 2.2 問題の所在

前節では既存の社会調査から、ひまわり運動の参加者の社会階層に関する構成を明らかにしたが、運動参加者の男女比率については女性が51.8%と男女比にはほとんど差がないことが明らかになっている(陳・黄 2015)。統計的に、男女比には大きな差が観察されないにもかかわらず、メディア報道の言説においては「女性運動参加者」の姿はほぼ見られない。

例えば、黄佳玉(2015)は、ひまわり運動をテーマに議論を行うシンポジウムにおいて、運動に参加している男性は一人一人名前を認識されていることに対して、女性は「社会運動の女神」、「(男性参加者の)彼女」などと呼ばれ、名前のない存在となっていると批判している<sup>5</sup>。また、林盈岑(2018)は、当事者としてひまわり運動に参加した際に、運動の中では大衆に向けて発言していたのはほとんど男性であり、社会運動に参加している女性は容姿でしか注目されることはなかったと指摘している<sup>6</sup>。陳怡禎(2020)も、ひまわり運動において、マスメディアに注目されていたのはほとんど男性であり、さらに運動の方向性を決める「運動リーダー」的存在が与えられている参加者もまた、ほとんどが男性であったと指摘している<sup>7</sup>。

上記の研究から、ひまわり運動において社会的な注目を集めたり、社会運動について語ることができたのは、いずれもほとんど「男性」によるものであることは明らかだろう。

くわえて、ひまわり運動の当事者でもあり、研究者でもある黄(2015)と林(2018)が指摘しているように、ひまわり運動の空間にいた女性たちは、「社会運動の女神」などの呼び方をされることもあり、いわば主体性を持たない「語られる存在」であったと考えられる。

本稿は、このように社会運動空間のなかで姿が

隠されている女性たちに注目し、彼女らはどのように語られているか、さらにどのように自分自身の位置付けについて語っているのかを、次章以降で分析する。

### 3 ひまわり運動における女性

本章では台湾の学術研究機関「中央研究院」によって保存されるひまわり運動創作物アーカイブ『318 公民運動文物紀錄典藏庫 (318 Civil Movement Archive)』<sup>8</sup>をデータとして、ひまわり運動期間に創作された創作物に焦点を当て、ひまわり運動における「女性像」が、いかに描かれているのかを考察する。そのうえで、9名のひまわり運動女性参加者にインタビュー調査をおこない、彼女たちの社会運動への参加経験についてどのような語りを行なっているのかを分析する。

#### 3.1 ひまわり運動を象徴する女性像

前章でも述べたが、「祝祭性」という性質を持つひまわり運動の空間では、日々大量の創作物が生み出されていた。その様子について、港は「運動への参加者、支援者が増加するとともに、街路にはさまざまな文字が溢れ出ていった。……群衆は文字の群衆を生み出すからである」<sup>9</sup> (港 2014: 190) と述べていたが、港が指す「文字」とは、「Word」が意味するものに限定されるわけではない。実際に、街路にあふれていた「文字」の形式は、現場で創り出されるモノや創作物、さらに現場における運動参加者たちの言説や振る舞いなど、そのすべてが「文字」に含まれていると考えられる。つまり、港が用いる「文字」という言葉は、まさに現場にいる人々が日々生み出す広義の「文字=メッセージ」であると捉えられる。

そのような運動空間において日々創出されていた「文字=参加者のメッセージ」のなかから、9,094<sup>10</sup>件の写真、動画、ポスター、横断幕、オブジェ、書信などが、『318 公民運動文物紀錄典藏庫 (318 Civil Movement Archive)』に記録として残されている。本節では、その創作物に焦点を当て、分析を進める。

まず、数多くの創作物はどのようなかたちで、

アーカイブに保存されているのだろうか。このアーカイブに関わった研究者・莊庭瑞 (2017) によれば、多くの創作物は、第一創作者が不明のままアーカイブに保存されており、いつか創作者が自分の創作にアクセスし、名乗りでることができるよう、創作物がアーカイブに寄せられていた際に明かされた情報を全てデータベースのサーチエンジンに紐つけていたと説明している<sup>11</sup>。その情報は作品形式、創作日時、創作場所、作品の大きさ、作品の内容概要、作品素材など、細かく記載されコード化されている。つまり、このアーカイブの利用者は、コード化された情報にヒットする任意のキーワードを入力すると、この作品に辿り着くことができる仕組みとなっている。

このような膨大な情報群のなかで、本稿はとりわけ「台湾」に関連する 1,000 件の作品に焦点を当てる。「台湾」に関連する創作に注目する理由は、前章でも述べたように、ひまわり運動の発端が中国との間の政治関係にあったと見られるからである。さらに、この運動の遠因としては、政治経済面での「中国依存」だと指摘されている (蔡宏政<sup>12</sup> 2016; 呉介民・廖美<sup>13</sup> 2016)。つまり、ひまわり運動においては「台湾対中国」という図式が構築され、(中国に対する)「台湾」は重要なシンボルとして認識されていると考えられる。

従来、台湾における政治活動や社会運動は、しばしば「我々台湾人は、台湾という土地に育てられてきた」ということを強調し、「台湾」を母親のイメージに関連づけてきた (黄恐龍<sup>14</sup> 2014: 108)。しかしながら、ひまわり運動において、そのイメージには変化が見られる。

例えば、「台湾」に関連する作品のなかには書信や絵画、付箋、写真、動画など様々な形式がある。また内容も多種多様であり、応援メッセージもあれば、漫画キャラクターの絵画もある。その多様性を持つ作品の中で、「ひまわりの花」(26点)、「台湾の形」(16点)や「女性」(11点)のイメージが多く使われていたことが確認できる。では「ひまわり運動」という呼称にちなんだ「ひまわりの花」や台湾そのものが如実に反映された「台湾の形」といったイメージと異なる「女性」イメージはどのように生まれたのか。

今回、11点の女性像を確認したところ、創作者が異なるにもかかわらず、その作品において共有されている女性像(女性イメージ)は、意外にも一致していることが明らかとなった。そのイメージとは、長い髪の両サイドに花を飾っている少女像である。その少女が台湾の国旗やひまわりの花を持っていたり、熊や山猫などの台湾固有種の動物のキャラクターに囲まれたりしている姿が描かれている。こうした少女イメージは、どのような経緯から誕生したのだろうか。

じつは、この少女イメージは、日本の「国擬人化」歴史コメディウェブ漫画である『ヘタリア Axis powers<sup>15</sup>』の登場人物「湾娘<sup>16</sup>」といったキャラクターの特徴と合致する。つまり、ひまわり運動で創出されたその少女像は、日本漫画に登場していた人物「湾娘」の二次創作<sup>17</sup>だと考えられるのである。実際にアーカイブに保存されている女性イメージを確認すると、合計1,325点の絵画資料のなかで、概要説明欄に「湾娘」と明記されている創作物は4点、また、明記されないものの、そのキャラクターに連想させられるような、長い髪の両サイドに花を飾っている女の子のキャラクター画像は14点あった。ひまわり運動の参加者自分自身のアイデアによる創出された数多くの創作物の中に、このような一つのキャラクターの二次創作に集約されていることから、「湾娘」がひまわり運動における存在感がうかがえる。

前述したように、それらの「湾娘」の二次創作の作品では、「湾娘」という単体の少女像だけではなく、国家意識を象徴する台湾の国旗や、ひまわり運動にちなんだひまわりの花、さらに、台湾固有種の野生動物などのアイテムも作品の中に書き足されている。原作漫画では「国の擬人化」として「湾娘」が登場したように、ひまわり運動の中の「湾娘」も、運動参加者が強調し続ける台湾アイデンティティを象徴していると考えられる。

また、原作の中では明るくて天真爛漫な性格の持ち主と設定されている「湾娘」と比べ、ひまわり運動の中で生み出された二次創作の「湾娘」は、運動の進展に合わせて変化した参加者の心境が投射されているように、ときには希望に満ちた笑顔

を見せたり、ときには戦闘態勢を見せたり、ときには無気力で泣き崩れていたりと様々な表情を持っている。つまり、ひまわり運動における「湾娘」という少女像には、ひまわり運動参加者の集合的アイデンティティを反映されているといえる。

しかしながら、本稿がとりわけ注目するのは、ひまわり運動の参加者がなぜ、他にもなく「湾娘」という少女像を用いて台湾アイデンティティや運動参加者アイデンティティを象徴していたのか、という点である。前章で運動の経緯について説明したように、ひまわり運動は、中国との政治経済関係や台湾政府に対し、対抗の声を上げていた社会運動であるが、その「対抗意識」は、政府による弾圧に対する身体的な反撃や、社会秩序への攪乱といったかたちで表すのではなかった。むしろ、より多くの人にひまわり運動に参加してもらうように、運動空間を占拠していた参加者たちは、常に「秩序」や「平和」を強調し、優しさを意味する中国語の「溫柔」という言葉を運動の合言葉として用いていた。それは、今まで台湾で行われてきた社会運動の行い方と一線を画する特徴であり、これまで社会運動とは無縁の人々を巻き込む要素だと言えるだろう。

そこで「優しさ」という概念が、どのようにひまわり運動で共有されていたのか、以下の事例を見てみよう。例えば、「ひまわり運動」の名前の由来は、この社会運動に賛同する意思を表明しようとした花屋の経営者が、大量のひまわりの花を占拠現場に送り込んでいたことがきっかけとされるが、その経営者は新聞記者の取材に対し、「この運動が激化するのを心配していたため、少しでも『優しさの力』をつけていこうと思った」と応じた(『蘋果新聞』2014.3.20)。

また、ひまわり運動において、スポークスマンとして毎日マスメディアからの取材依頼を受けたり、運動の進捗を参加者に報告したりする役割を担っていた林飛帆や陳為廷という二人の大学生がいた。その二人は「運動リーダー」と呼ばれ始め、この運動に関心を持つ人々から注目されていた。林は雑誌の取材に応じた際に、キューバの革命家、チェー・ゲバラの名言を引用したうえで、「私は元々臆病な人間だった。しかし我々は強くならな

なければならない。そうすれば我々は決して優しさを失うことがない」(『遠見雑誌』2014.5.5)と発言したが、この林の発言もしばしばスローガンとして、運動参加者の間で共有されていたとみられる。

さらに創作物を保存しているアーカイブには、「溫柔(優しさ)」について言及するものも34件があり、なかでも「温柔的な力量(優しさの力)」と印字されていたメッセージカードが多数記録されている。

以上の例から、ひまわり運動では、「優しさ」を繰り返して強調していたことがわかる。ようするに、同社会運動において「優しさ」は上位的価値観として、参加者の間で共有されていたと考えられるのである。さらに、ひまわり運動に参加している若者たちは、「無力でありながら声を上げている弱者」として自分自身を位置付け、真正面から権力者と衝突する力を持っていないからこそ、逆手をとって「優しさの力」で、既存の社会権力に異議を唱えようとしていると言える。

では「弱者による対抗」や「優しさ」という価値観が共有されていたひまわり運動において、参加者によって創出され、消費された少女像には、どのような意味が付与されていたのか。

家父長制社会における女性表象を分析している若桑みどりは、歴史上に多くの女性像は、真理や崇拜の象徴として生産されていたことについて、「ある社会で生産された女性イメージが、直接的にその社会における両性の関係を表象しているわけではないことは明らかにわかる」(若桑2000:10)と指摘している<sup>18</sup>。

例えば若桑は、キリスト教社会において、伝統的なシンボルである「マリア」のイメージは、女性地位の高さや母性への崇拜の象徴のように見えるが、実際はそれが男性の価値観によって生成されたものであると指摘し、以下のように述べている。

男性支配的な文化においては、男性全体の心性を統合するには、抽象的で空白な記号が必要だったということである。社会的にいかなる身分もなく、いかなる現実性にも汚染され

ていない「無名の」女性の身体は、男性たちの心性の統合の象徴として掲げるにふさわしい記号になった(若桑2000:11)<sup>19</sup>。

若桑は、男性支配社会において女性は無名かつ見えにくい「他者」的な存在だからこそ、シンボルとしてかえって使いやすいため、上位的観念の擬人化として、女性像はしばしば表したと指摘している。つまり、家父長制社会において生産される女性像は、実は男性の想像や願望によって作られるものであり、男性支配の構造をより一層強化する作用をもたらしていると考えられる。

本稿の2.2の「問題の所在」でも整理したが、この運動の参加者のうちに女性参加者は約半分を占めていたにもかかわらず、名前のない存在となったと批判されている。そのような女性が不可視化されている社会運動の環境では、台湾アイデンティティの象徴として少女像が作り出されていたのは、若桑が提示した論点に基づいて考えることができるだろう。

すなわち、「台湾アイデンティティ」という上位的価値観を表象する「湾娘」のような少女像は、ひまわり運動の男性中心主義的性質を象徴していると考えられるのである。さらに言えば、こういった少女像は、ひまわり運動において繰り返して強調される「弱者による優しさの力」を表象しているとも考えられるが、このような女性イメージは、台湾社会に期待されているジェンダー役割に沿ったものである。

ここまでの議論を整理する。本稿は、祝祭性を持つひまわり運動の中では台湾アイデンティティの具象化として、一つの少女像が創出されていたことに焦点を当てて分析していた。その台湾アイデンティティを象徴する少女像は、「優しさ」や「弱さ」の表象でもある。運動参加者は、戦略的に正面から政府に対抗するのではなく、「優しさの力」を上位的な価値観として共有し、その優しさで既存の社会構造を揺るがそうとしていた。このような社会運動空間で創出された少女像は、一方では激しい抗争や流血衝突などの従来の社会運動と異なる新しい社会運動のイメージを構築した。しかしその一方で、運動の合言葉である「優しさ」の

具像化として創出された少女像は、従来の家父長制社会で期待されているジェンダー役割に沿って、作りあげられていたものだと言える。

### 3.2 女性運動参加者はどこにいるのか

前節では、ひまわり運動において、女性像はいかに描かれ、語られていたかについて検討した。次に、本節では社会運動に参加していた9名の女性インフォーマントに実施したインタビュー調査をデータとして用い、女性が「いかにして自分の社会運動の中の位置づけについて語っているのか」という点について検討していく。

まず、本稿が採用する主要な調査方法を説明する。本研究は半構造化インタビュー調査法(Semi-structured interview)に基づき、2015年7月から2016年8月にかけて、ひまわり運動に参加していた9名の20～30代女性を対象に行った。インフォーマント自身が指定した場所で、食事会を兼ねてインタビューを行い、あらかじめ筆者が用意した質問事項を設定したうえで、インフォーマントにその回答を求めつつ、彼女らの反応によって柔軟に質問を進めた。

インフォーマントの詳細なプロフィールは以下の「表1」のとおりである。インフォーマントA、B、Cは友人関係である。彼女らの普段の関係性や会話の雰囲気をつかむために、グループインタビューという形式を採用した。またインフォーマントDは、ひまわり運動の後に日本の研究機構に転職したため、日本のカフェでインタビューを実施した。インフォーマントG、H<sup>20</sup>の出身地は一緒に共通の友人がいる知り合いであり、同じく日本武道館コンサートを開催した台湾出身の人気バンドを追いかけて訪日していた。彼女が食事会を約束したためその場に同席させてもらい、インタビューを実施した。インフォーマントEは、スケジュールの関係で直接に対面できなかったため、インターネットのテレビ電話を通してインタビューを実施することにした。そのほかのインフォーマントへのインタビューは、全て一対一の対面調査を行った。

表1：インフォーマント詳細プロフィール

対象者	年代	職業	学歴	出身	インタビュー場所
A	30代	日系企業OL	大学	台湾北部	台北市某レストラン
B	30代	商社OL	大学	台湾北部	台北市某レストラン
C	30代	特許事務所勤務	大学院	台湾中部	台北市某レストラン
D	30代	大学研究員	大学院	台湾北部	日本東京某カフェ
E	20代	病院受付	専門学校	台湾中部	テレビ電話(Skype)
F	20代	大学生	大学	台湾北部	台北市某大学周辺カフェ
G	30代	会社総務	大学院	台湾南部	日本東京某カフェ
H	30代	書店経営	大学	台湾南部	日本東京某カフェ
I	30代	外資系企業OL	大学	台湾南部	台北市某レストラン

本研究は2.1でも述べた「日常性」や「祝祭性」といったひまわり運動の特質を念頭においたうえで、この社会運動に参加していた女性たちの「日常生活」や「ひまわり運動」、それぞれの社会空間での振る舞いや文化実践に注目する。インタビューは、①「ひまわり運動への参加方式や運動実践」②「ひまわり運動での出来事や生活リズム」③「普段の生活リズムや日常的趣味」の三つを軸に実施した。ここでは、とりわけ①や②のデータを取り上げ、分析を進めたい。

まず、9名のインフォーマントに、どのようにひまわり運動に参加していたかについて尋ねると、彼女たちは全員、仕事や学業の合間を縫って、1日中のうちの数時間だけ参加していたと回答した。社会運動は、日常生活とは異なる性質を持つ出来事だが、自分自身の日常生活リズムを崩さずに、その出来事としての社会運動に参加するようにしていたと言える。

また、一人でひまわり運動に参加するのではなく、常に家族や友人と事前に約束して共に運動空間に足を運ぶようにしていた。しかしながら、彼女たちはグループで運動空間に進入したにもかかわらず、その空間に入ったあとそれぞれの趣味関

心に向かって各々自由行動していた。

例えばインフォーマントIは、よく仕事か食事後に散歩に兼ねて妹か友人と運動現場に訪れたと述べている：

妹と一緒に住んでいたからいつも思い立ったら妹と二人で運動現場に行ったけど。二人だったら、もう行ってもいいかなど。でも時々すごく大人数になって、10人くらいとか。例えば、友達に「私は明日行くよ」と言ったら、友達も「じゃ私もいこうかな」と言ってさらに別の友人に誘ったとか。結局10人くらいになったりして(笑)。終わったら一緒にご飯に行ったりした時もあった。

(筆者：10人で一緒に行動しましたか?)

そうじゃなくて、現場に到着したらもう解散だね。例えば現場に置かれている絵画を見たい人は絵を見に行ったり、ライブを見たい人はライブを聴きに行ったり、講演会に参加したい人は講演会に行ったりした。(インフォーマントI, 30代, 外資系企業OL)

インフォーマントIの発言から、社会運動を特別な出来事ではなく、日常生活の中の一場面として捉えていることがうかがえる。

例えば、彼女は「終わったら一緒にご飯に行ったりした時もあった」と発言した。ひまわり運動自体は、国家議場やその周辺などの特定な場所を、長期間に渡り、占拠していた社会運動であるにもかかわらず、彼女は、その社会運動を「仕事」「食事」「友人との集まり」などの生活場面と同列に捉え、自由に社会運動空間に出入りしていると言える。さらに、彼女は、家族や友人と共に運動空間に行っても、結局既存の人間関係ネットワークに執着せず、各々の趣味関心に沿った新たなつながりを生成していった。つまり、彼女は「社会運動に参加すること」を目的とするのではなく、普段から趣味関心を持つことに触れるためにその空間に足を運んでいたと言えるだろう。

また、大学生のインフォーマントFは、住んでいる学生寮が運動現場に近いので、運動期間中に常に寮と社会運動現場に行き来していたという：

ひまわり運動の最初の三日間は、運動現場に寝泊まりして参加した。でも寮も近いし、運動が少し落ち着いた後にも学校の授業に行かないといけなから寮に帰った。(中略)二日目の夜にもシャワーを浴びたくて寮に帰ってシャワーして自分のベッドで寝ていた。その後もちょいちょい友達と彼氏と一緒に現場に行って寝泊りした。その時に現場はもうすでにいろんな生活用品が用意されていた。ブランケットとか寝袋もあったし。そういえば、ある金曜日の午後に、実は私はその後に授業に行かないといけなから、課題を運動現場でやっていた。周りの人は私の作業姿を見てアイスクリームをくれたよ。(インフォーマントF, 20代, 大学生)

社会人のインフォーマントIと比べて、大学生のインフォーマントFの運動空間に滞在する時間が明らかに長かったが、彼女は、シャワーを浴びたい時に寮に帰ったり、授業前に大学の課題を運動空間に持ち込んだりし、社会運動空間や自分の生活空間の境界線を曖昧化し、自分自身の生活の延長線上にひまわり運動に参加していたと言える。

なぜ、ひまわり運動に参加していた彼女たちは、生活空間や社会運動空間を自由に行き来できたのか。その理由は、彼女たちが意識的に運動空間の周縁に立ち、自分自身を浮遊的存在として認識していたからだ。以下のインタビューデータから明らかとなった。

たとえば、9名のインフォーマントは、社会運動空間においてどのように自分自身を位置付けているのかにかんする質問に対して、口を揃えて「人数合わせ」と答えていた。

例えばインフォーマントDは、以下のよう述べている：

国会議場までに入れた人たちはすごいと思った。私だって人数合わせのような感じだった。国会議場までに入れた人はある程度[筆者註：社会運動に役に立つような]能力を持っていると思う。私は、比較的周縁にいる人間だ



し、「人数合わせ」に役に立っていたかもしれない。でもそれも重要だと思うよね。現場に行ってひまわり運動を応援すること意思を表明しないと。(インフォーマント D, 30 代, 大学研究員)

インフォーマント D は、発言中に何度も「人数合わせ」という言葉を口にしたが、実際に調査を受けたほかのインフォーマントたちも、このように自認していた。

しかしながら、彼女らは決して自分を過小評価するわけではない。例えば、インフォーマント D は、ひまわり運動には応援の声をあげるサポーターの存在が重要だと認識している。

また、インフォーマント C (30 代, 特許事務所勤務) は、インターネットを通じて運動現場の状況を確認するのは日課であったが、運動現場に居合わせる人数が足りないと思ったら、必ず仕事後に足を運ぶようにしていたと述べている。運動現場の参加人数にこだわる理由は、参加者が自由に入出りできるひまわり運動の空間性ゆえに、現場を占拠する参加者数が減ってしまうと政府に参加者を排除しやすい条件を与えてしまう危機があるからである。

以上のデータから、社会運動に参加する女性たちは、周縁からひまわり運動をサポートする役割を果たそうとしていたと言える。実際に、陳(2020)は、ひまわり運動が三週間も長期化できた要因の一つとして、運動空間の周縁にいる多くの人々の参加が挙げられると分析しているが<sup>21</sup>、その周縁から中心をサポートする役割を担っていたのは、「人数合わせ」と自称している彼女らを含めて多くの不特定多数の参加者だろう。

しかしながら、なぜ彼女らは運動空間の中心ではなく、意識的に周縁に立っていたのだろうか。以下のインフォーマント B と C の会話を見てみよう。

私達は好きな時間に行けばいいし、いつでも出て行けるし、負担は比較的になかった。まあ、途中から、議場を占拠した学生たちが可哀想に思っていたときもあった。だって、

全国にずっと見られていたよ。でも、私達は、[筆者註：議場を占拠した学生のように]そこまで犠牲しなくて良かったかも。(インフォーマント B, 30 代, 商社 OL)

その [筆者註：ひまわり運動の] 空間から出ていたら、私は安全だ、すぐ日常に戻れる」ということは不思議すぎるでしょう。だから私もたまに思った。私は本当に「抗争」しているか、「社会運動」をしているか。でもそれもある意味で幸せかも。(インフォーマント C, 30 代, 特許事務所勤務)

上記の会話からは、彼女たちは、運動の内部やその外部である日常生活空間により容易く抜け出せるように、運動空間の周縁に意識的に立つようにしていたことがわかる。

つまり、彼女たちは受動的に運動空間の中心から周縁まで排除されたのではなく、自分自身の位置を調整し、能動的に運動空間の周縁に自らを位置付けていたのである。さらに、彼女たちは、社会運動の中心部まで進出しないのは、私的領域に属する日常生活と、公的領域に属する社会運動を両立させるためであると言えるだろう。

ここで本節の議論を再度まとめておこう。社会運動に参加している女性は、日常生活の延長線としてひまわり運動に参加していたが、その際、能動的に社会運動空間の周縁に立つように意識していた。それは、彼女たちが日常生活空間や社会運動空間を自由に行き来するためであった。

#### 4 おわりに——「語る／語られる女性」の二重性

本稿はまず社会運動空間のなかで、女性がどのように語られているかを考察し、男性支配の社会空間、さらにその男性支配の力構造が複製されたひまわり運動空間において、「優しさ」や「弱者」の表象として、一つの「少女像」が生産されていたことを明らかにした。

またその一方で、運動に参加していた女性は、どのように自分の社会運動空間のなかのポジションを語ったのかについて、インタビュー調査を通

じて考察した。その結果、女性たちは能動的に男性支配の社会運動空間から距離を取って周縁に立っていたことが明らかとなった。

一見すると、女性は受動的に社会運動空間から排除され、不可視化されている存在であるがゆえに、男性中心主義が反映された「女性像」が構築されていたように見えるが、実際のところ女性たちは戦略的、かつ能動的に運動空間の「周縁」に自らを位置付けることで、非日常空間である社会運動と日常生活空間とを自由に往還していたと考えられる。

このように、ひまわり運動空間を「女性」という視点から捉えるとき、そこには「語られる女性」(＝創作物などにおける表象としての女性像)と「語る女性」(＝自らについて語る当事者の声)の二重性が存在し、それぞれが重なり合うところにこそ社会運動における「女性」が立ち現れるのである。

もちろん、本稿にはいくつかの課題も残されている。たとえば、ひまわり運動に参加する女性たちが、家父長制的な価値観のもと、ジェンダーステレオタイプによって「女性」としてまなざされることを、どのように受け止めているのかについてはさらなる説明が求められる。前半で論じたように、女性は運動において“「優しさ」や「弱さ」の表象”としてキャラクター化され、「台湾」という国家の弱さのイメージと重ね合わされていた。しかし、後半で論じたように、女性たちは純粋に「優しく、弱い」存在ではない。戦略的、かつ積極的に社会運動の「周縁」という場所を選び取ることで、むしろ家父長制的価値観を解体していく潜在的なエンパワメントの可能性や野心を持っているのである。彼女たちが、「語られる女性」に象徴される家父長制的なまなざしをいかに解消していたのか——つまりアイデンティティ構築をしていたのか——については、さらなるデータの検討を踏まえて別稿で論じることとしたい。

※本稿は科学研究費補助金(2019年度第2回研究活動スタート支援・19K23275)(2020年度若手研究・20K13706)による成果の一

部である。

## 註

- 1 毛利嘉孝『文化＝政治 グローバリゼーション時代の空間叛乱』月曜社, 2003年、渡邊太『愛とユーモアの社会運動論』北大路書房, 2012年、伊藤昌亮『デモのメディア論—社会運動社会のゆくえ』, 筑摩書房, 2012年、富永京子『社会運動のサブカルチャー化: G8 サミット抗議行動の経験分析』せりか書房, 2016年、富永京子『社会運動と若者: 日常と出来事を往還する政治』ナカニシヤ出版, 2017年。上記文献を参照する。
- 2 港千尋『革命のつくり方 台湾ひまわり運動——対抗運動の創造性』インスクリプト, 2014年
- 3 福島香織『SEALDs と東アジア若者デモってなんだ!』イースト新書, 2016年
- 4 陳婉琪・黃樹仁「立法院外的春吶: 太陽花運動靜坐者之人口及參與圖象」『台灣社會學』30:141-179頁, 2015年
- 5 2015年3月14～15日に開催された「318太陽花運動一週年學術研討會: 重構台灣—太陽花的振幅與縱深」シンポジウム記録より。
- 6 林盈岑『我們的故事: 太陽花眾女群像』国立台北大学社会学系2018年度修士論文, 2018年
- 7 陳怡禎「社会運動空間における「女性の遊び」——台湾ひまわり運動を事例に」『女子学研究』10:25-34頁, 2020年
- 8 <http://public.318.io> を参照する。
- 9 港・前掲書190頁
- 10 2017年11月17日時点での保存数である。
- 11 莊庭瑞, 曾沅芷「當代事件之記憶: 318公民運動文物紀錄典藏庫之建立」, 檔案半年刊16(2):32-41頁, 2017年
- 12 蔡宏政「世界體系、中國崛起與臺灣價值」吳叡人・林秀幸編, 『照破: 太陽花運動的振幅、縱深與視域』左岸文化, 49-73頁, 2016年
- 13 吳介民・廖美「占領, 打破命定論」吳叡人・林秀幸編, 『照破: 太陽花運動的振幅、縱深與

- 視域』左岸文化, 115-161 頁, 2016 年
- 14 黄恐龍『野生的太陽花』玉山社, 2014 年
- 15 本作は、元々は作者の日丸屋秀和の個人サイトで同人作品として発表された作品であるが、その後漫画書籍化やアニメ化され、メディアミックスされた。また、漫画書籍化やアニメ化された時のタイトル名は『Axis Powers ヘタリア』であるが、本稿では『ヘタリア Axis powers』に統一する。
- 16 実際、そのキャラクターは原作の中で作者に正式名称がつけられていないが、読者からは「湾娘」と呼ばれることが多い。
- 17 本稿では、二次創作を「既存のアニメ・マンガなどのキャラクターや設定を援用し、読者によって作られた新たな作品」と言った飯塚邦彦(2015:63)の定義を援用する。詳しくは、下記文献を参照する：飯塚邦彦、「二次創作する読者の系譜：「おたく系雑誌」における二次創作の背景を探る」『成蹊人文研究』23:63-90, 2015 年
- 18 若桑みどり『象徴としての女性像 —ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』筑摩書房, 10 頁 2000 年
- 19 若桑・前掲書 11 頁
- 20 一人のインフォーマント G の友人も同席していたが、彼女はインフォーマント H とは初対面のため、時々会話に割り込んで発言したがインタビューに不参加と表明したため、調査対象から除外する。
- 21 陳・前掲論文
- 莊庭瑞, 曾沅芷「當代事件之記憶：318 公民運動文物紀錄典藏庫之建立」, 檔案半年刊 16 (2) : 32-41 頁, 2017 年
- 陳婉琪・黃樹仁「立法院外的春吶：太陽花運動靜坐者之人口及參與圖象」『台灣社會學』30: 141-179 頁, 2015 年
- 陳怡禎「社会運動を語る若者——台湾ひまわり運動・香港雨傘運動を事例に」『新社会学研究』4:141-161 頁, 2019 年
- 陳怡禎「社会運動空間における「女性の遊び」——台湾ひまわり運動を事例に」『女子学研究』10:25-34 頁, 2020 年
- 富永京子『社会運動のサブカルチャー化：G8 サミット抗議行動の経験分析』せりか書房, 2016 年
- 富永京子『社会運動と若者：日常と出来事を往還する政治』ナカニシヤ出版, 2017 年
- 福島香織『SEALDs と東アジア若者デモってなんだ!』イースト新書, 2016 年
- 港千尋『革命のつくり方 台湾ひまわり運動——対抗運動の創造性』インスクリプト, 2014 年
- 毛利嘉孝『文化＝政治 グローバリゼーション時代の空間叛乱』月曜社, 2003 年
- 林盈岑『我們的故事：太陽花眾女群像』国立台北大学社会学系 2018 年度修士論文, 2018 年
- 若桑みどり『象徴としての女性像 —ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』筑摩書房, 2000 年
- 渡邊太『愛とユーモアの社会運動論』北大路書房, 2012 年

## 参考文献

- 伊藤昌亮『デモのメディア論—社会運動社会のゆくえ』, 筑摩書房, 2012 年
- 吳介民・廖美「占領, 打破命定論」吳叡人・林秀幸編, 『照破：太陽花運動的振幅、縦深與視域』左岸文化, 115-161 頁, 2016 年
- 黄恐龍『野生的太陽花』玉山社, 2014 年
- 蔡宏政「世界體系、中國崛起與臺灣價值」吳叡人・林秀幸編, 『照破：太陽花運動的振幅、縦深與視域』左岸文化, 49-73 頁, 2016 年